



1、 3、 1、 1 東北大震災一周年

3月11日は誰もが忘れ得ない『東北大震災発生の日』である。黙禱！

これと並べるのは不謹慎だが、今月は私が奈良へ転居して一年目にも当たる。

これまでも何度か「土地に慣れない」ことの愚痴をこぼして来た。結論的には私の心身が柔軟性を失い、融通性を欠いていることが問題なのだが、近ごろの新聞を読みながら、それとは違う面も見えて来た。

私が最初に奇異に感じた一つに「人権を尊重しよう」のポスターや看板が多いことがあった。取り立てて言わずとも、人権は尊重されねばならない筈である。しかし、新聞を読んでいるうちに「当然のことが当然ではない」ことが少しずつ見えて来た。県会や市会の奇妙な事。議員氏の不可解な行動に官吏たちの公金横領や公務の放棄。警官の事件捏造。教師の不祥事。市民にも信じられない事件がいくつもあった。

そんな中での大阪維新の会の様々な主張。大阪都構想のことは少し置くにしても、私には当然と思われることが改めて論議の的となっていることを知り、此処において、最初に奇異に感じた「人権尊重」問題が密接に係わり、根底に巣くっていることに思いを致すようになってきた。

私が強く感じる住み良い社会のこと。親しく話を交わすどころか、朝晩の挨拶さえ嫌う人が多いことに驚き、根は深いことを感じる。見知った顔でも背けて通る方が安全というのは私には理解できないが、ここではそうせざるをえない事情があるらしい。

『東北大震災一周年』が近付き、東南海地震に備える番組や記事も多いが、『天災と人災』についての論説が増え、そのいずれもが、昨今の人情や社会モラルの低下や互助互譲の薄さを嘆き、このままでは人災の方が大きくなると警告している。

『絆』は流行語で終わって生きて働かず、公共心や社会道徳・礼儀に欠け、儲け主義が幅を利かせて、災害に耐えられないのではないかと心配されている。



2. 奈良県庁屋上の「ミツマタ」

奈良で日中友好に関する協議会があると誘われ、ついでに新聞で見た「県庁の職員食堂が廉価で美味」を試してみようと思った。残念ながら食堂は土日閉店だったが、警備員に「屋上の景色がいいですよ」と勧められて上る。なるほど素晴らしい！昼食は後回しにして四方を見渡す。

明治維新の際、興福寺領地のこの辺りが、「神仏分離令」により建物が壊されて空き地となり、僧侶は還俗して官庁が建てられたと聞くが、一等地であることは間違いない。屋上から見る南一帯が現在の興福寺。鹿が遊ぶ広大な公園の緑のなかに各種の葎が見えている。東は東大寺で南大門から大仏殿。間もなくお水取りの松明が燃え盛る二月堂や、先日の山焼きの若草山。平城山から春日山まで一望のもと。北に京都方面を望み、西には生駒山が見えている。

ふと見ると黄色い花が咲き誇っているので聞いてみると「ミツマタ」とのこと。どうして県庁屋上にミツマタが咲くのか判らないが、とても美しい。紙幣の原料だ。

フロアに降りてくると銅像があり、説明書に「日中友好のために中国から送られてきた鑑真和上像」とあった。唐招提寺の鑑真和上像より若い感じ。

歩いて数分の藤田ビルで日中友好協議会に参加する。奈良日中でも記念行事として植林をしたいとのことで協力を求められた。静岡日中で堤先輩がとても苦勞されたことが思い出される。資料は持って来たはずなので探さねばならない。奈良日中にはいろんな人が在籍して居られるようだ。清水日中も門戸を広げねばなるまい。



3、風呂風景

風呂についてはもう何度か記してきたが、私が利用させてもらっている三カ所の風呂をもう一度紹介する。

① 平群(へぐり)天然温泉

平群とはなかなか読めない地名だが、歴史は相当に古く飛鳥時代にも溯れるとか。松永久秀・筒井順慶・鳥左近などどこかで聞いたような武人にも関係があるらしい。斑鳩とは隣町になり、わが家から車で数分のところに温泉がある。温度がかなり高く、私は足湯・腰湯・胸までというふうにし少しづつ入るようにしている。

この温泉のもう一つの話は『風呂名主』のこと。この人、わざわざ大阪から毎日入浴に来るそうだが、知らぬ人でも次々に声を掛けて身元調査を行い、最後は自分の自慢話を聞かせる。話題は豊富で人をそらさず面白い存在となっている。

② 斑鳩町営浴場

平群温泉とはほぼ等距離位にある浴場で、公設だから最も安く、我々には無料券まで配布されている。湯量は豊富。浴場がやや狭い。湯温は私には最適。ほとんどが老人であり、同じ町民ということもあって他では見られぬ礼儀正しさ・譲り合いがある。男湯でも互いに健康を確かめ合う会話が交わされ、家内の女湯では、風呂友達という関係もあるらしい。女性的な情報が交換され、特に健康指南が多いという。

③ 平城宮温泉

1300年遷都で賑わった平城宮跡のすぐ西にあり、昔の大宮人も温泉を楽しんだのかと思わせる。人気があり宿泊客も多く、食事や土産物売り場も充実している。入湯料が高いため割引の日に行く。湯温はややぬるめ。露天風呂もあるが青空ばかりで朱雀門も大極殿も見ることが出来ぬのは残念。

足湯(番外)

生駒山を間近に見るところに「足湯」がある。足湯の腰掛け、近くにトイレがあるだけの簡素なもので、入湯料も無料。用いている人が少ないが湯量は豊富である。波んで持ち帰るための装置があり、100リットルまで百円。1リットルでも百円。



春を待つ木々は 座禅の如くいる 寒そうに干されてる竹 茶筌里
 伎芸天 拝す御堂の冷え厳し 信号待つ我に従う冬の鹿
 聖武帝からの過去帳 お水取り 関伽井屋の聖水を汲む お水取り
 後醍醐帝落ちし山路のフキノトウ 桜餅 この一葉は吉野から
 国宝の屋根でいさかいする雀 拝殿も聖域ならず砂かけ祭
 かの国にのぞみヒカリもコピーされ ピースする中国人て気持ちワル
 なでしこが負けるとみんな黙ってる このゴミも科学の粋の結晶だ



4、精進料理『阿じろ』店長・ご逝去

大本山妙心寺ご用達で、冬の京都観光では定番として有名な精進料理『阿じろ』の店長・妹尾正晴氏が逝去された。3月15日夜、享年76歳。

戦後の混乱の中、仏教界も例外ではなく、若い僧侶も激減する中で禅宗料理復活に生命を掛けたのが『阿じろ』主人の故・妹尾勝好氏。老僧連の指導宜しきもあって、たちまちに精進料理にこの店ありと言われるようになった。

「京都では100年ほどでは老舗とは言いません」などと同業の厳しい非難を浴びながらも、立派な技能で「妙心寺に伝統的精進料理あり」と知られるようになる。

これを経営面から支え、京都観光に進出したり、日本中に広がる妙心寺派地方寺院にも精進料理を持ち込んだのが弟の正晴氏で、正晴氏と私は高校時代の同級同学。

「清水に精進料理を持ち込めるか」と問う私に「何を言うか」と料理一切から黒塗り膳や五つ揃いの椀まで全てを百数十人分を持ち込んで提供してくれた。

これを機縁として『阿じろ本館』や『花園会館』へ足を運んだ清水人は多いはずである。我々も同窓会といえ『阿じろ』を利用していた。

その正晴氏が危篤であることを知らされたのは三月初旬。見舞いすべきかどうか悩んだが、代表二人で京大病院へ行く。ガリガリに痩せ、マスクをしていて会話は出来なかったが、我々の話にしっかりと目と顔で反応。最後は動きにくい右腕を挙げての握手で別れてきた。葬儀は18日。花園に近い「天神川ホール」で行われた。



5、とうとう一年間、音楽をしなかった

上記の妹尾正晴氏が亡くなったとは知らず、わたしは生駒にいた。古くからのリコーダー仲間、大阪人の上村氏が「生駒にリコーダークラブがあり、16日には老人擁護施設で訪問演奏をするから手伝ってほしい」と依頼があったからである。

昨年、転居以来、初めてリコーダーのケースを開く。放置してあったためコルクが痛んでおり、応急処置で演奏に参加する。一年ぶりの音出しであった。